

むがし、あつたけど。

むかし、ある村に、働きのじいさんとばあさんがいました。ふたりは、毎日、朝早くから夜おそくまで働きましたが、いつこうに暮らしは楽になりませんでした。

ある年のこと、村の人みんなで、茅場の野焼きをすることになりました。じいさんも行きませんでした。

茅に火をつけてしばらくすると、ぼうぼうと燃える中にきつねのすがたが見えました。茅場のなかに巣があつて赤ん坊を生んだばかりでした。村の人たちは、

「きつねなんか、焼いてしまえ」といいました。じいさんは、

「なんぼきつねだといつても生きている命だ。早く助けねば」と思って、大急ぎで、火の中から子ぎつねをいっぴきつかまえて、ポーンとほうつてやりました。きつねは子ぎつねを口にくわえて、わらわらと逃げていきました。

少しして、じいさんは、町へ買い物に出ました。その帰り道、日が暮れて道が見えなくなつてしまいました。じいさんがこまっていると、親子のきつねが松明を持って出て来ました。そして、じいさんの先に立って、村の入り口までちゃんとつれていってくれました。雪を踏み固めて、じいさんのわらぐつが埋まらないようにしてくれます。

「ははあ、こりゃ、このあいだのきつねだな。きつねでも人に恩を返すもんだなあ」

じいさんは、きつねに助けられて家に帰りつきました。

つぎの日、じいさんの家に、きれいな娘が来て、

「ごめんください。わたしは、このあいだ助けてもらったきつねです。恩返ししたくて来ました」といいました。じいさんが、

「ほう。また恩返ししてくれるのか」といっていると、娘は、

「おじいさん、わたし、これから、金の茶釜になりますから、お寺に売りに行ってください」といいました。そして、クリククリククリクと回ると、ぴかぴかした金の茶釜に化けました。じいさんとばあさんはびっくりしました。そして、

「ほんにありがたいなあ。明日になれば、ひとつ売りに行ってみようか」といって、茶釜を枕もとに置いて寝ました。

つぎの日、じいさんは、となり村の物好きの和尚さんのところへ茶釜を持って行きました。

「和尚さん、和尚さん。きのう、茶釜を見つけたんだが、こんなりにっぱな物をわしが持つていてもしかたがない。買ってくれませんか」

じいさんが見せると、和尚さんは、

「ほう、りっぱな茶釜だ。こういう物は、お寺においてこそ値打ちがある。いくらで売るかな」といいました。

「そうですね。金の茶釜だもの、千両箱ひとつもらわないと」

「よし」

和尚さんは、千両箱ひとつで金の茶釜を買いました。じいさんは、ほくほくしながら帰りました。

和尚さんは、小僧さんに、

「小僧、小僧。金の茶釜は火にかけるとすすがつくから、けつして火にはかけるなよ」といつけておきました。

あるとき、小僧さんは、和尚さんのいうことをすっかり忘れて、茶釜を火にかけました。そのとたん、茶釜はすすで真っ黒になりました。小僧さんはあわてて、火からおろすと、

「こりゃあ、たいへんだ。和尚さんに見つからないうちにみがかないと」といって、灰をつけて、茶釜をずいずいとこすりました。すると、茶釜が、

小僧 小僧 痛いから そつとみがけ

小僧 小僧 痛いから そつとみがけ

といいました。小僧さんは、

「なんだかしゃべっているような歌っているような、おかしな音がするなあ」と、ふしぎに思いながら、また、茶釜のおしりをこりこりとみがきました。すると、また、

小僧 小僧 痛ったいから そつとみがけ

小僧 小僧 痛ったいから そつとみがけ

といいました。小僧さんは、

「和尚さん、和尚さん」とさげびながら和尚さんを呼びに行きました。

「あの茶釜、変ですよ。おらがみがくと、小僧、小僧。痛ったいから、そつとみがけていうんです。来てください」

「それは、おまえの耳の聞き違いだ。何を寝ぼけている」

「そんなこと、ありません。早く来てください」

和尚さんを無理やり連れてきて、みがいてみましたが、茶釜は、うんともすんともいいませんでした。

「みょうだなあ。ゆめでもみたのかなあ」

「そうだろう。金でできてるから、ぴかぴかしててそんな気になっただけだ」

和尚さんはそういつてあちらへ行きました。

小僧さんは、ありつたけの力でもって、ごりごりと茶釜をみがきました。すると、茶釜が、

小僧 小僧 痛い痛い痛いから、そつとそつとみがけ

とさげびました。

和尚さんも聞きつけてとんで来ました。

「あらら。これは、化け物じゃないだろうか。火にかけてみる。うんと薪をくべて、どんどん火を燃やしてみる」

小僧さんが、かまどにどんどん火を燃やすと、茶釜から、足が出て、しっぽが出て、手が出ました。

「あらら。きつねだ」

きつねは、あつというまに、屋根の窓からびょーんと逃げてしまいました。和尚さんは、

「あらら。わしの千両箱、待て」といつて、追いかけていきました。

じいさんとばあさんは、千両箱で、末永く楽々暮らしましたとさ。

とんびすかんこ ねっけど

村上郁再話

資料『雀の仇討』野村純一・敬子